

●特集●変化の時代に対応する学校経営

インタビュー

「選択」「責任」「連帯」の教育改革へ



橋爪大三郎 ▼東京工業大学教授

① 日本の産業社会の活力を取り戻すには

編集部 今回は、先般出されました社会経済生産性本部の社会政策特別委員会中間報告書の「選択・責任・連帯の教育改革」について、お話を伺いたいと思います。

まず、報告書を出すに至った経緯や問題意識、背景といったところから聞かせていただければと思います。

橋爪 教育の問題について考える際、従来は、教育は教育、産業は産業、行政は行政、というように互いにバラバラになっていて、その相互関係を十分に考慮してこなかったと思うんです。今までの産業界は教育は学校で適当にやってください、あとは自分たちでやりますからといったスタンスでした。これで何と

かやってこられた。

しかし今回、この提言を企画した生産性本部という団体は、工場の中でいろいろ生産性を高める努力をしてきたけれども、行き着くところまで行って、あとはできないことばかりになってしまったという認識に至ったのです。例えば銀行で生産性を上げようと思っても、実戦ですぐに役立つ専門知識を大学で学んでいていないし、人々の行動様式が十分合理的でない。つまり生産性が上がらないわけです。その他一般企業でも、事情はだいたい同じです。

生産性をこれ以上上げるためには、社会の他のセクターとの関連を重要視する必要がある。そう考えて教育の根本的な見直しを提言しようということになりました。

教育は本来、教育者と、教育してもらいたいと思う生徒と、

それから子どもに教育を受けさせたいという親と、その三者が幸福に出会って、信頼しあって行なう共同作業である。そしてそれを国がサポートすることだと思ふのですが、サポートの仕方があまりにも上手であったために、最近ではどうも歯車が逆に回っている、だから規制緩和が必要になってきているわけです。

具体的に言いますと、さまざまな制度—学校の設置基準、学習指導要領、教育委員会の制度などが、本来の機能からずれてきて、現場からやる気、活気、創意工夫を奪う方向に働いているということなんです。そして、唯一機能しているのが受験教育です。こういうことで生徒のやる気を阻害して、学習意欲の荒廃を招くわけです。ひいては日本の産業社会の活力、学術・文化の水準に大きな陰りを生んでいるわけです。教育本来の活気を取り戻さなければならぬ、そういうことが動機であったと思います。

編集部 それは産業社会の方が方向転換をしたために、教育の方が取り残されたという感じですか。

橋爪 その通りかもしれません。教育に関して言いますと、これまでの日本の強みが弱みになっているところがあるのではないのでしょうか。

日本の強みと言われているのは、小学校などで、読み・書き・計算にあたるものを、世界中のどこにも負けないレベルで達成したとか、高等学校にほとんど全員が進み、大学教育も普及し

て、産業社会の発展に貢献してきたとか、そういった過去の成功です。しかし、過去の成功が足かせとなって、その枠組みから抜けられない。そこに過度に適応してしまい、特殊な学校社会、学校文化をつくってそこに安住してしまう。そこから外れることは、何かもう教育ではなくてしまうかのような、無意識の思い込みが教育現場に蔓延しているのではないかと思います。

本来、教育は日々内容を新たにしていかなければならないわけです。永遠不変の原理もあるでしょうが、その具体的な表れは社会の進展に即して変わっていかねければならない。教育現場はそういう社会の変化にもっとも疎く、もっとも取り残されてしまっている部分ではないかと思うんです。ところが、子どもたちは新しい情報に敏感で、この学校と生徒のギャップがもう極限にまできている。教師と生徒のコミュニケーションギャップがあるのではないのでしょうか。

② 学力の定着度を測る基準のないのが問題

編集部 その辺のところが、例えばいわゆる「学級崩壊」などに現れているわけですね。今回の改革案のキーワードは一つには、「規制緩和」ですね。それからタイトルにあるような、「選択」「責任」「連帯」ということですが、この三つのキーワードについて説明していただけますか。

橋爪 どういう教育を受けるかは、教育を受ける当事者の問題なので、その人の希望や資質能力などに従って教育を社会的サービスとして提供していく。これが基本ですね。今まではそれに加えて、公平・平等の原理が言われてきました。それも結果の平等であつたので、一律に教育を行なうことに随分大きなエネルギーを費やしてきたと思います。その結果、本人の希望が受け入れられず、本人の資質を伸ばせない教育になってしまったのではないのでしょうか。

そこで、「選択」「責任」「連帯」ということなのですが、今までは制度が動くには、基準が定められて一、二の三で全国一斉に教室で授業をし、勉強していくということだったのですが、そうではなくて、こういう教育需要がありますよ、それに合わせたサービスをしてくださいというように学校が柔軟になるということですね。そうしますと、どういう教育を受けたいのかに關して親や本人に、それなりのイメージがないといけない。まずそれを考えることとなります。教育は、人生の一部であり、人生の出発点でもあるとすれば、子どもなら子どもなりに、高校生なら高校生なりに、自分がなぜ教育を受けるのかとか、将来何の役に立つかについて考えてもらわなければいけない。親もそうですね。今、これなしに高校にいる人が多すぎるのではないのでしょうか。ここがまず「選択」です。

次に「責任」とは、「選択」をしたら、しっかりと勉強しましょう、それから学業以外のことも十分やりましょう、高校生として

て、人間として充実した生き方をめざしましょうということですね。さらに「連帯」とはそれをサポートする親、先生、地域社会、国、そして産業界、これらの連携を十分にとりましょうということですね。

編集部 「選択」「責任」についてはよくわかりました。しかし一方では教育として共通的に必修にすべきものもありますし、また、ある程度は選択してもいいという部分もあると思います。そのあたりのかねあひはどうお考えでしょうか。また高校教育はともかく、義務教育も大きく自由化しようというお考えですか。

橋爪 教育の根本は何でしょうか。教育の根本は、理解だと思うんです。わからないことは、どんなに教えこんでも無駄です。むしろ、後味の悪さと反感のみが残るのではないのでしょうか。

次に、理解はどのように起こるのでしょうか。それは、きちんとわかりやすく教えてもらったとき、そして自分が考えるスピードにちょうどよいスピードで教えてもらったときです。つまり、理解には個人差があるわけです。これが現実です。

ところで、学習指導要領というのは何でしょう。それは、一定のスピードで授業をしないという、授業の方法論を決めているものです。漢字を学年別に配当したり、二次方程式は中学校では難しすぎるので、特別な場合を除き高校で教えるとかを決めているものですね。

しかし、教えた結果が生徒に十分吸収されたかどうかに関し

③ 教え方の自由がさらに必要

編集部 いま進められている高校教育改革もそうした考えと非常に近いものだと思うのですが、どうでしょう。

橋爪 不十分です。なぜならば、そのために必要な教育資源の最適配置をするための工作が欠けているからです。もし教育内容を削減していくというのなら、それは大幅な選択の自由、そして教え方に関する自由化を伴わないなら意味がないのです。

いまのやり方は、みんなで駆け足をしていたが、落ちこぼれる人が多いから、みんな並足にしてゆっくり歩きましょうということなんです。それで落ちこぼれはたぶん減るでしょう。でもその代わりに学力水準が下がります。そしてこんなにゆっくり歩いてられるか、という大勢の人たちが脱兎のごとく駆け出して、学校から塾、予備校、私立学校などに行くでしょう。そしてそこで駆け足をしていくので、学校教育の荒廃はさらに進みます。だからこれは間違いです。駆け足のスピードを並足にするというのはあまり意味がない。

なぜみんなが同じスピードで歩かなければならないのかという、ここを変えることの方がはるかに大事なのです。本人の資質と意欲が十分な人には、いままで以上に十分学校で教育をする必要があります。どんなことをたくさん教えた方がいいじゃないですか。学校で十分学力が身につくのであれば、塾や予備

校にだれが行きますか。そのために大きな時間的ゆとりが生まれるはず。画一化こそ最大の問題です。

また、高校で多様化とよく言われておりますが、これも見かけの多様化です。どうしてかと言うと、学校やコースが多様になるだけで、そこに入学した個人は一樣でなければならぬのです。学校をそんなに多様なコースに分けていく必要はないのです。そうじゃなくて、教育内容を基本的なものに絞り込んで、個人の意欲と素質に応じて多様な教育をすれば、その目的は十分達せられるのです。

④ ライセンス獲得のための学力検定(＝高校)を

編集部 ひとつ議論があるところが、高校教育の位置づけの難しさなのですが、そこはどのようにお考えでしょうか。完成教育か準備教育かという議論もあります。

橋爪 戦前の教育と戦後の教育は全然違いますよね。戦後の教育も戦争直後の六・三・三・四制の設計段階では、高等学校という名称の通り、高等教育の一角に位置づけられていたと思うんです。中学は完成教育でした。

現在の高校卒業者のうち、四〇％の人が大学・短大に進み、専門学校やその他のものを入れれば大半の人がさらに学業を続けていくでしょう。この実態においては高等学校が完成教育なのか、それとも準備教育なのか、こんな議論はいくらやっても

それ以外とは一切関係ない。だから、隣の人に何か聞かれて教えてあげても何のためらいも起こらないんです。相對評価をやっていると、隣の人に教えると隣の人の成績がよくなって、結局自分の足を引っ張ることになるから、ちよつとためらわれるんです。ここがまず違う。そこで「連帯」が生まれている。

自動車学校の教員と生徒の間もそうで、教員というのは学校の外にある試験をパスするために存在しているわけですから、生徒の勉強を手伝ってくれるんです。また教わる方も、わからなかったら積極的に聞いていくわけです。それで、学校の勉強や、いわゆる座学が苦手そうな人たちでも自動車に乗らないとしようがないという事情もあるのでしょうか、学科でも構造でも一生懸命勉強していたり、また構造をわかっていたりして、おぼちゃんなんか質問されたら、きちんと説明したりしているわけです。

国民のかなりの人たちが運転免許を取ろうと思えば取れる。あのレベルはどのくらいかと考えてみると、高校くらいではないでしょうか。自動車の構造や法規を教えますけれども、その内容を、世界史や日本史や国語や英語に置き換えてみるならば、それなりの学力が見込まれるではないか、そういう潜在力はみんな持っているのではないか、足りないのは目的意識とそれを促進するための仕掛けだなと思っただけです。

だからまず、高校の学力認定をするんだったら学校の中で試験をしてはダメです。学校の外でやらないと甘えと妥協が生ま

無意味です。高等学校を卒業して社会に出る人は一応のピリオドが打たれるから、それは完成教育と考えなければならぬし、大学・短大などに進学していく人にとっては準備教育以外の何物でもない。一人ひとりによって意味が違うものです。実態がそうならば、個性に対応する高等学校にはその二通りの道を用意しておくべきなんです。それは一つの学校の中に必ず二通りの道がなければならないという意味ではなくて、個人が高校を自分なりに位置づけて、どちらでも進めるようになっていくということ、それが大事です。

編集部 そして、高校の学力を保証するために、学力検定をやるということですか。

橋爪 これは、私が以前自動車免許を取るために自動車学校に行つたときの経験によるものなんです。そこは私がそれまで行つていた学校と大変違う場所だったんですね。どのように違うかと言うと、まず通う生徒はみな免許を取りたいという目標がはつきりしている。教える側も免許を取らせたいという意欲がある。そしておぼさんも、兄ちゃんも、みんな助け合つて勉強していることにとても驚きました。いままでも私たちが考えてきた学校という言葉のイメージとは異なる場所でした。

それで、その理由について考えました。まず第一に評価方法が相對評価じゃないということがあげられます。隣の人がどんなに勉強ができて自分には関係ない。自分の運転技量、学科試験の成績は、自分がどれだけやったかに関係するのであって、

れますから。今は高校の卒業資格は学校の中で認定しているの

で学校ごとに幅があるので社会的に信用されないわけですね。もうひとつは、認定する内容を絞り込んで、それを社会的に通用するためのライセンスと位置付けるといいです。実質的に日本国民としての資質を高等学校で要求しようということ。九七％が進学しているんですから、そのうちの八〇％／八五％の人に覚えておいてもらいたい最低限の内容をきちんと決めれば、いま中位校や底辺校で目的意識がなくて悩んでいる人たちはそれで救われると思います。

⑤ すべてを競争試験から資格試験へ

編集部 バカロレアなどある程度近いものですか。

橋爪 バカロレアは難しすぎます。大学進学資格ですから。大学に進学する人は、高校生の半分くらいなので高校検定を大学入試と結び付けてはいけません。むしろ世の中に通用する社会人の必要条件という位置づけにしなければならぬ。

自動車免許の比喩でさらに言いますと、大型二種免許のようなものはどうかということが考えられます。つまり特別な能力ですね。これはさまざまな資格としても考えられますが、大学進学に関しては言えば、物理学科に行くのであれば、物理学科に行くための一段・二段・三段というのがあっていいと思うんです。これもまた外部試験で客観的なものです。例えば、ある

大学が世界に通用する物理学者をつくりだそうと思うなら、高校生に対して、高検だけではだめですと言います。例えば数学は二段を取ってきてください。物理は三段を取ってきてください。化学も二段、生物は一段、地学は何もなくていいとか、そういった入学資格を設定するわけです。物理学者になろうと思った生徒は、どの大学で物理を学ぶかということを考えて、その要求水準を確認します。そして、行きたい大学が要求している段位に繰り返しチャレンジして、段位認定が得られるまで自分の好きなときに勉強すればいい。段位が取れてしまえばそれ以上勉強する必要はない。このように、自分のペースで勉強できる。ここが大事ですね。

編集部 そうすると大学入学試験は大幅にその性質が変わるということですね。

橋爪 もちろんそうです。現在の大学入学試験は競争試験です。だから試験日の前の晩まで、直前まで気が抜けないんです。ちょっとでも寸暇を惜しんで勉強し、一点でも多く取れるように全身全霊を傾けていかなければならない。これは何の意味もないと思います。段位というのは何点取ろうが段位が取れてしまえばいいのであって、夏休みに集中して勉強して、九月に試験を受けて受かった、したらそれで終わりなんです。段位が揃ってしまえば、あとは大学で頑張ることにして、じゃあ小説でも読んでおくとか、スポーツでもやるかとかいうことでもいいんです。自分のペースで好きに勉強できます。

編集部 そのためには試験に対する考え方やその周辺の価値観を変えなければいけないことになりそうです。

橋爪 私は競争試験はなくていいと思うんです。全体を資格試験にするべきです。資格を取得したということで入り口で絞り、あとは専門教育の中で、教授がよくできていると太鼓判を押したならば、そこで奨学金ももらえるし大学院にも進学するし、研究者になっていくということではないのでしょうか。せっかく大学に入ったけれども教科書がよくわからない、何だか成績もばつとしないとなると、それは専門がむいていないということですから、他の進路を考えるとということになるでしょう。

私の考えでは高校は、高検の準備、あるいは高検に合格した人がさらに勉強するための学校とするならば、何を教えてもいいんです。できない人のためには、小学校・中学校の内容の復習をやればいい。高検にあつという間に合格しちゃった、じゃあどうしましょうかという生徒が多い高校は、物理の何段の試験を勉強しましょうという、つまり進学準備ですね。これをしてもよい。入学試験はないんですから、飛び入学なんてしなくたって高校で大学の内容を学習すればいいんです。

そういう本場にクオリティーの高い授業を高校でやれば、大学が単位を認定してあげてもいいと思うんです。

これは高校の先生のプライドにとつてもとてもいいことで、高校の先生は大学院に在籍していたり、専門の研究者になろう

と思っていた人も結構多いし、歴史とか哲学とか数学などの専門家でありながら、いろいろな就職状況の結果、高校に在籍しているという先生も多い。そういう先生は大学レベルの授業をやるとなると喜んでやるし、適性があるんですね。

私は、いまチェーン展開している英会話の学校に通っているんですけども、私が行っているのは自由が丘校で、そのほかに渋谷校もあつたりしますが、渋谷校の方が自由が丘よりランクが上とかないんです。どうしてかと言うと、学校差よりも学校の中の個人差の方が大事だからです。どの学校も全然話せない人から始まって、六・五・四・三・二と段階があるんです。だから、自由が丘校の三と渋谷校の三は同じなんです。どこに行っても差はないんです。高校もそういうふうになればいいんです。

6 高検は学校間格差をなくす

編集部 先ほどの高検の考え方によれば、学校間格差はなくなるということですね。

橋爪 高検があれば、どの学校に行こうが関係ないわけです。今は高校によってどれぐらいの学力があるか全然違うわけですから、どこの高校を卒業したかを聞かないとその人の力があまりわからない。この高校ではまずいというふうに親も本人も思うから、学校歴が大事になってしまうんですね。そうすると高

校の入学試験というのは、また細かい無駄な競争なんです。しかも入ったあと勉強しない。

改革をするなら、まず現実を見ないといけません。そして、現実の一番の問題点をつきとめなければならぬ。高校問題の大きなひとつは、内容の画一化と偏差値で輪切りにされた結果の多層化でしょう。

建前は、高校はみんな一緒です。建前と現実がとんでもなく乖離しているわけです。ではそれをなくすにはどうすればいいのか。原因はどこから来たのか。そこに手をつけるのが改革で、それに手をつけないで何を言おうと改革の先延ばしです。

7 校長を専門職として位置づけるべき

編集部 ちょっと話は変わりますが、今回の社会経済生産性本部での提言は、学校経営や、校長の役割についてもさまざまな提言をしております。そこについてお伺いしたいのですが。

橋爪 学校は、いわば中小企業です。また、学校といえどもビジネスです。社会的機能を十分に果たし、生徒や親に十分に満足していただいて、これで学校と言えるわけでしょう。だからそのための努力、方法論、厳しい自己規律が必要です。

そうすると、校長先生の仕事の仕方が、事なかれ主義や、曖昧な人事管理とかそういうことであつては全然駄目です。そうではなく、果敢にもつと何かできることはないか、もつと子ど

ものためにしてやれることはないかという前向きな考え方をし、積極的にアイデアを出し、強力なリーダーシップで先生方のチームを率いて、彼らが最善の状態で授業ができるように、そして学校の雰囲気明るく楽しいものに管理、マネージしていく必要があります。

今の校長先生は、はっきり言えば官僚になってしまっていて、積極的仕掛け人になるようなタイプの人は少ないと思います。校長には校長としての資質というものがありますから、必ずしも現場で教える方がうまい先生、経験のある先生、あるいは教頭先生タイプの人が校長先生として成功するとは限らない。校長先生として成功する人は、仮に若くても資質が十分にあればそれでつとまると思います。

中小企業の社長は、どんな人でも頑張りますが、なぜでしょう。それは、自分の資産を自分で管理しているからです。管理して失敗したら自分の資産を失ってしまうでしょう。自己責任です。だから自分の能力を最大限に使う。高校も同じですよ。校長先生は、自分の学校での教育的アチーブメントを自分の資産にして、それに対して報酬をもらう。こういう原則をはつきりさせれば、みんなやる気を出すはずです。校長として失敗したら次から校長になれないのですから。

そのために、かなり早い時期から校長候補生みたいな人は副校長とか、校長の見習いという形で教頭先生やその他の先生とは違った経験をさせてみるべきだと思います。そして、校長と

た、文部省に、少なくともある政策選択の自由度を生み出すような効果はあつてほしいと思います。

一般の方々から、私のところに寄せられる声は、こういう改革ができればいい、なぜこういう改革案がなかったのか、という励ましの前向きで熱意のこもった声が多いです。また、日教組の方々にもいろいろ話を聞いたんですが、私が想像していた以上に柔軟な受け止め方ではなかったかと思っています。もちろん日教組も立場があるから、公務員としての身分に関わる校長の人事権などに関しては、どうしても慎重になると思うけれども、私たちの意図するところは汲んでくださったと思っています。

つまり、教育者の専門職としてのプライドが一番大事であるということ、それに社会の評価が与えられること、そして待遇がそれについてくること。学校が教育機関として蘇って、親や社会の支持も受けて公的支出も少しは増えるということです。いまの教育には根本的な問題があつて、いまここで手をつけないうとどうしようもないという問題意識を、教員ばかりではなく世の中の人が共感することが必要であるということ。ここまでは多くの方が理解してくださったと思っています。

その先の方法論で議論ができるなら、教育の当事者の方々と具体的には詰めていくべきだし、最後はプロの方々に、具体的なことについてはお任せするということになるかもしれない。

しての自覚と責任を持てるような専門職としての校長を位置づけたほうがいい。校長にはいろんなノウハウが必要だと思ひます。

編集部 要するに校長は教師の経験を積んでそこから上がっていくということとは異なってもよいということですね。

橋爪 そうですね。専門職ですから若くてもいいわけです。そのかわり待遇は必ずしもよくないかもしれない。権限と待遇を区別すればよいと思います。経験を積んだ教頭先生や、あるいは英語や数学で非常に教える方がうまい、本当に信望が厚い先生、こういう先生の待遇が一番で、次が教頭先生で、給料の面からいくと校長先生が一番低いということだつてよいと思います。

しかし、権限においては逆で、マネジメントは校長に権限を集中させて、その下でその他の先生がある部分を任せられそれぞれの部門についているという学校像でいいのではないのでしょうか。

8 学校が教育機関として蘇るために

編集部 最後に、今回の報告は読みようによつては、非常に大胆で教育関係者からの反響も大きかったのではないのでしょうか。

橋爪 まったく理解不可能な報告書ではないと思っています。皆さんにそれなりには理解していただいていると思います。ま

編集部 これでまた本報告も出るということですね。

橋爪 七月に出ます。今回の中間報告に、最小限の手直しを加えて大幅に加筆するということになると思います。具体的には、学校に関しては学生の話と学校理事会の話をもう少し書き込みます。それから、高検や高校の入学について少し書き込みます。それから大学についても、奨学金の所を中心に少し書き込みます。分量は五割増しぐらいになると思います。それを第二部とし、第一部は教育の哲学、教育の理念はどうあるべきか、社会背景について膨らませます。第三部は、学校と家庭教育ということ、親の責任、親と学校の関わり合いについて書きこんでいく予定です。全体で一〇〇ページ、三〇〇枚くらいのものになり、七月にできあがる予定です。

編集部 また報告書が出てから読ませていただきます。本日はどうもありがとうございました。

(はしづめ だいざぶろう)

